

2007年度 卒業論文講評

2008年2月 小関 隆志

鈴木ちひろ 「ホスピスの重要性と役割、その展望」

近年「医療崩壊」などと騒がれ、医療機関の経営難や医療費の増大、医師不足の深刻化、地域の医療格差など、医療をめぐる問題は多くの人々の関心を集めています。私たちが病気になった時に、はたして安心して医療を受けられるのかという不安も高まっています。

この論文のテーマとなっているホスピスケアは、日本でも最近注目されるようになった考え方で、ただ病気を治療するのではなく、患者の精神的・肉体的な痛みを取り除き、全人格的なケアを行うことを目的としたものです。特に末期がんなど治癒の見込みがなく、死期の近い患者が主な対象となっています。高齢化が進み、常のがんが死因の上位を占める日本においては、こうしたホスピスケアは特に重要な意義をもつものと考えられます。

鈴木さんは将来、看護師になることを目指しており、医療問題に深い関心を寄せて、この重いテーマを選びました。

鈴木さんはホスピスケアの理念に共鳴しながらも、「ホスピスは重要だ」でとどまることなく、さまざまな問題意識をもって深く調べていきました。

詳しい内容は本文に譲りますが、鈴木さんの問題意識で特に優れているのは、一つはホスピスケアを広めていくには、専用の施設でのケアだけでなく在宅のホスピスも増やしていくべきだ、という点。もう一つは、ホスピス・ボランティアを増やしていくべきだ、という点だと思います。日本は欧米に比べて専用施設の整備が後れており、医師不足や医療費増大なども深刻なため、施設ケアだけでなく在宅でのケア、ボランティアの活用という解決策は現実的で説得力が高いと思われます。

鈴木さんはホスピスの実態や人々の意見を知るためによく努力を重ねました。「ピースハウス」というホスピスを訪問しセミナーに参加したり、病院などで118名にアンケートをとったり、さらにはホスピスケアの普及をしているNPOを訪問したりして、積極的に調査しました。これらの調査に裏打ちされて、論文の内容はとても説得力が高まっています。

鈴木さんには今後、仕事を通してホスピス普及の課題を考えていってほしいと思います。